

村の嫁の座は針のむしろ

里草会顧問 福井正樹

「嫁さん嫁さん 菓子おくれ。菓子を くれん嫁さん いんどくれ（帰ってしまえ）」と唱和するように、年上の子から教えられた。実際お嫁さんに向かって言ったかは記憶はない。しかしこの囃子言葉は、子供心にも一方的な言い分で気の毒な気がした。勝手な要求をして、応じてくれないと帰れと嫌味を言う。村の嫁という立場が、それほど弱く、理不尽な目で見られていることの、子ども心への反映なのだろう。

村に来る嫁は公会堂の広場あたりで車を降りて、嫁ぎ先まで歩くので、そこに行列ができる。子供たちも群がってその列について行き、担当の人から豆を炒った程度の粗末な菓子をもらった。座敷で両家の親類同士の宴会がなされているのを、縁側に登って障子に唾をつけて穴をあけて覗いた。おばさんたちは盛んに噂と情報を交換して、感心したり羨んだり、ここで嫁さんの故事来歴や評価が決まってくる。結婚式の半月くらい前に荷物が届き、近所の人などに披露されているので、詳しい人が事細かに論評する。

敗戦後、戦争に取られていた男たちが帰ってくると、待ちかねたようにあちこちで結婚式があった。村では嫁どりと言っていた。嫁どりは周りが見て、嫁を貰うのが当然という状態にあれば、いつなのか、どうなっているのか、ことある毎に探りが入れられ、うわさが独り歩きし、結果的には、いつどこからどんなお嫁さんが来るということが、早くから村の中には知れ渡っていた。

婚家では、相当早くから家のあちこちを直したり建て増したり、日程が決まれば障子やふすまを張り替え、畳を替えて宴会の準備がなされた。派手な結婚式の費用が余りにも高かったりして、批判や反省がなされ、生活改善が提唱され、順次形式も出費も簡素になる。しかし敗戦直後は貧しい農家でも、一定の形式を維持して、因習や見栄などから、驚くような出費がなされた。めったにない家の大行事なので、習慣に従って人並み以上に見せる。親戚も寄り集まって見劣りしないよう執り行うので、人間関係の体面や因習が残ってしまうのだ。力のある親戚は、助けもするが横車も押す。

私の育った村の嫁どりは、一日目の夜は両家の親せきなどが集まって飲み食いし、その翌日は村の戸主全員を招いて披露する大宴会であった。この時に酒を十分飲ませ、誰もかれもが飲みつぶれるまで飲んで騒ぐものとされている。酒樽をカラにして転がすという意味で、これを「樽こかし」と言った。男たちは娯楽の少ない村の生活の中で、この時の無礼講の宴会振舞いを手ぐすね引いて待っており、日ごろ我慢しているうっぶんも、酒の力を借りてついでに晴らすので、後まで語り草になるほどの騒ぎもしばしばである。

物不足と統制されていた時代なので、大量の酒の確保に苦勞した。この地方では男手に余裕のある家では、冬には但馬杜氏に連れられて、灘の酒蔵などに出稼ぎに行く。4月に勤めを終えて帰る時、1斗の酒樽をもらってくるようになっていた。その酒を前もって予約し、何人分も集めて樽こかしの酒にした。だから嫁どりは春早々になった。

当時は村に青年男女があふれていたし、行商人や親戚の端々まで適当な人を詮索する。寄るとさわると嫁どり間近の家のうわさなどが繰り返されて、仲人などの行き来が激しくなる。双方の親戚も寄り集まりしばしば口を挟み、当人同士の知らない間に何もかも決まってしまうことも少なくなかった。結婚式の日初めて顔を合わせて話したというのも、珍しくはない。

叔父の場合は祖父母が60歳を超えていたので、嫁どりをせかされていたが、なかなかうんと言わなかった。向学心が強く大学に合格し、先生も説得に来たが、祖父母は、絶対許さなかった。長男次男3女4女を成人した後亡くしており、嫁がせた長女、次女（私の母）も夫を亡くして、子育てに苦勞している。祖父としては家長として全体の面倒を見なければならない。たった一人残った末子の叔父の成人を待ちわびていた。なまじ学問すると百姓を継がないし、学校に行かせると帰ってこない。叔父はかろうじて通信教育とたまの集合教育を受けて我慢した。

祖母は妹の長女を娶らせようと思っていて、私には早くから姉さんと呼ばせていた。妹が嫁ぎ先で子供を残して亡くなっており、祖母は親代わりを自認していた。ところが叔父は絶対嫌だといったらしく、祖母が親代わりになって別の村に嫁がせた。叔父は従姉妹結婚の弊害を嫌ったのか、年上だったからか、背が自分より高かったからなのか、理由は私には判らない。子供が関係することでもなかった。

その女性は、たまに里帰りとして祖母の所に来たが、手はグローブのように赤くはれて、夕食や話もそこそこに祖母は休ませたが、翌日の夕方帰る頃まで起きてこなかった。嫁ぎ先は立派な家で、主人も上背のある美丈夫だった。結婚式に金を使いすぎたとか祖母は心配していたが、相当過酷な日常だったのであろう。子供を産んだあと1年くらいで自殺してしまった。村の嫁の自殺は、そう珍しい事でもない。

叔父は何度か見合いもさせられていたが、うまくゆかなかった。祖父母が問いただすと、定時制の家政科の女性の名を挙げたので、その家とうちとの間の村に住んでいる遠縁の人を仲人に立てて、いろいろなやり取りが交わされていた。もちろん嫁どりを意識して離れも建てた。叔父は農業改善に努め、足ふみで周る砥石を入れたり、サイロを作って牛の餌も蓄えたり、新しい技術の習得に熱心だった。また、かまどの改良や浴室をつくり、台所も建て増して生活改善にも努めた。

祖父母は人より変わったことをすると笑われるとしぶっていたが、叔父は「笑いたいものには笑わせて置け」と取り合わなかった。祖父が村や一族の長老で、他人から口を挟まれることがないので、叔父は自分の意思を通し、思い切った改善ができた。

祖父母もやっともらったお嫁さんに気を遣った。お嫁さんも結婚式の翌日から朝一番に起きて煮炊きをした。翌朝も深夜に及ぶ宴会の片づけの後、最初に起き出して台所仕事をし、その後も続いた。それでも家のしきたりには差がある。仏壇に朝供えたご飯は、おひつに戻して食べるが、お嫁さんの実家は捨てていたらしく猫のお椀に放り込んだ。罰が当たると言われて、あわてて拾って自分の口に押し込んでいた。